

II—5

文化研究における地域の意味

（議長 河合隼雄）

発表 矢野暢

一、地域研究とは何か

あらかじめ、地域研究とは何かを、私なりに定義しておくことにしたい。「地域研究」とは、人文科学、社会科学あるいは自然科学のいずれの分野をとわず、世界の諸地域のなりたち、あるいはそこでの人間の営みについて、ある地域の全体像もしくは個別的局面を対象に、実証的手法により解明を試みる学術的研究をいう。この定義には、地域研究を尊厳ある学術的方法論として保つための用件をさりげなくふくませている。

しかしながら、地域研究の歴史は、すでに示唆したように試行錯誤に満ちみちている。そして、いまなお地域研究の学的正当性が十分に確保されたとはいえない状態にある。問題の所在はどこにあったのだろうか。

地域研究には、それに多くの優れた研究者が従事し、多くの成果があげられたにもかかわらず、いくつかの陥穽がまわりついてきたかのようである。当然のこととして、地域研究と結び付いた社会科学も、そのいくつかの陥穽におちいることになった。それは、文字どおり「陥穽」であって、あらゆる専門家の足許にいまなお用意されているかもしれないのである。まず、第一の陥穽は、意外なことだが、ほかならぬ「地域」という概念それ自体の非現実性である。

地域研究の初期において、「地域」の意味論的確定の努力が

なされないわけではなかった。たとえば、ジュリアン・スチュワード(Julian H. Steward)は、「それは世界地域(a world area)、すなわち世界的重要性(国際関係がらみてアメリカにとつての重要性)をもった地域、たとえばロシア、極東、南アジア、東欧などでありうる。また、それは、文化地域(culture area)、たとえばラテン・アメリカ、近東、中米、マヤ・インディアン、などでありうる。しかし、その場合、アメリカにとつて、同時代的重要性はあるかもしれないし、ないかもしれない。また、それは国家(a nation)、たとえば中国、ロシア、ブラジルなどでもありうる」(1)と、含みの多いとらえかたをしている。スチュワードは、このほか、植民地、特定地方(specific region)をも「地域」として扱っている。「地域」をスチュワードの言う意味での「世界地域」と同義的に考えるやりかたは、本質的に戦略的、あるいは世界戦略的な意味の定め方であるということも出来よう。しかし、このような「地域」概念こそが、その後の地域研究の中心的タームとして定着するのである。世界がいくつかの地域に分けられ、それぞれの地域を対象とする総合的研究計画を設けること、そしてその枠内にいくつかの国家単位を想定して、そのそれぞれについて研究を深め、そのためにそれぞれの国語を修得し、そこで実証的な調査を重ねることが地域研究なの

であった。

しかし、言うまでもなく、世界をまずいくつかの地域に区切るやりかたは、国際政治の現実在即した、いわば世界分割論的な発想であった。国際政治学という「従属体系(subordinate system)」とここでいう「地域」とは奇妙に照合しあうのである。(2)したがって、このような「地域」概念を設定したそのこと自体によって、地域研究の総体がそもそも政策科学的性格をおびる結果にもなった。

「地域」をめぐる問題(3)は、要するに、それがあたかも現実的所与として存在するかのように、客観的な定義を下すことができずすれば、その反面で、極めて恣意的なくりかたのうえにたつてある人為的な区画を作り出し、それを「地域」と呼べるという面もある、という点に求められる。(4)

第二の陥穽は、地域研究およびそれを手段とする社会科学が、現実政治の要請にたいして距離ないし緊張を保てないことからくる学問の「政治化」現象である。それは、いいかえると、地域研究が政府政策ないし特定国益と結合し、アカデミズム本来のエトスに存在理由を置くのではなく、同時代的な現実政治の要請、しかも政治価値が多元的に存在する状況で、特定政治価値の担い手の側からの実利的要請に存在理由を委ねる傾向、といってもよい、第二次大戦後、ただちに冷戦状況が発生したことによって、この傾向は焦眉の現実性を

もって地域研究に迫ることになった。

東南アジア研究の場合、ベトナム戦争によって、事態は一層深刻になった、ベトナム戦争へのアメリカの積極的介入の論理必然的な結果として、東南アジア研究の分野においては、いわば地域研究のめどない自己拡張の制度化をみることになった。それは本来的なアカデミズムの分野での地域研究をたすける動きでもあったが、非学問的な分野で疑似的研究・情報蒐集・広報活動などの諸活動の制度化が進行するダイナミズムでもあった。そして、肝心なことだが、アカデミズムの積極的・消極的な政治関与まできたのである。

第二次大戦後の冷戦的状况においては、このような地域研究の「政治化」は不可避であったかもしれない。ハロルド・オーランス(Harold Orlans)が明快に説いているように、そのような歴史的状況において、「社会科学」は「価値自由」ではありえず、ある種の複雑さをもった社会的事業(social enterprise)になってしまう(5)のである。オーランスは、重ねて、社会科学が政治の現実的要請に応じてますます実用的な学問になる趨勢はどうにもならないことを認めている。そして、政治の水準が低劣化するとき、社会科学がある種の危険に瀕することを示唆している。

ただ、地域研究の「政治化」をもたらした原因は、けっして単純なものではなかった。

問題は、このグループがなにげなく選んだ「開発」ないし「発展」というテーマであって、これが、当時のアメリカにおける社会通念上の意味論を探ったとき、ほかならぬ「反共で親米的な政治的安定」(6)ということの意味したことを考えると、それがどれほど没価値的ではなかったかがよくわかる。社会科学が実用性の世界に導き込まれたとき、それは、社会科学固有の論理とエトスではなく、現実政治がらみの実用性の標識にしばられることになり、ひいては学問の墮落、とくに地域研究が巨大な政策科学の集合体となる傾向につながった。たとえば、ベトナム現代史の研究は、「学問から心理戦争の素材へ」(7)と墮落したのである。

最後に、第三の陥穽である。象徴的に、意味論的陥穽といっておこうか。

第二次大戦後における地域研究が、没価値的な配慮に貫かれたわけではないことはすでに指摘したとおりである。しかし、実は政策科学化とかいう、いわば学問以前の陥穽よりはるかに深刻な、学問固有の領域においてすらむつかしい陥穽がつきまとったのである。対象認識に付随する存在非拘束性の問題ということもできようが、異文化世界を対象とするだけに、正に意味論的陥穽としかいいようのない問題としてそれは発生し、克服されないまま今日にいたっている。

この問題は、文化・言語・意味という三位一体的な捉えか

たで迫るほうが妥当であろう。言語を、ある社会共同体によって採用された、必要な合意事項と正統的精神の総体の表現方式、とかりに定義するとしても、政治言語にももう少しべつの意味づけが必要になるかもしれない。たしかに、ここで政治言語というときには、それは政治的世界の本質に即して、もう少し複雑な含みをもつ(8)そのことはともかく、問題は、地域研究のあらゆる欠陥が、まさにこの点をめぐる苦悩を経なかったことから生じているように思えてならない。たとえば、「国家」「権力」「政策決定」「支配」「行政」などという政治現象を説明する基本的なタームが、おしなべて風土性をもつという問題がある。これは、一面では、抽象的タームによる現実把握の困難の問題、あるいはタームの翻訳不可能性の問題として考えることもできる(9)し、もう一面では固有文化に即した政治現象の多元性のこと、したがって、政治理論の多元化の可能性を示唆する問題として受けとめることもできる(10)いずれにしても、政治言語、すなわち固有言語によって表現を与えられるべき土着的あるいは普遍的価値は、あらゆる政治の世界において核心的な意味をもつものである。そのことによってアイデンティティの確認がなされると同時に、外界の認識、解釈、了解、対応がごとくしばられるのである。(11)そういう政治言語は、政治的象徴と政治文化との絶妙な接合のうえになりたつものであり、これからの地域研究

は、まさにその点についての十分な洞察と吟味を抜きにしてはなりたたないのである。「文化相対主義」的アプローチの成否も、まさにその点における知的操作の成否にかかっているといえよう。

二、相対主義的認識

ここで、議論を先に進めるにあたつて、少し思弁的な手続を踏んでおくことにしよう。いましがた「文化相対主義」について語ったが、地域研究は、社会科学のなかに価値としての相対主義を導入する知的営為であるともいえる。社会科学が人間の尊厳についての科学であり、そのかぎりにおいて絶対的な価値基準を置くことを当然の通念としてきている以上、相対主義は危険思想ですらありうる。しかし、二十世紀は、いったんあらゆる普遍主義的理解を崩すことに意味をみようとする時代であり、そこに相対主義の科学としての地域研究が正当性をもつ土壌があつた⁽¹²⁾

二十世紀には、たとえばナショナリズムの高揚という時代風潮がみられた⁽¹³⁾そのことによって、「民族」が人びとのユーロピアとして了解される傾向が生じた。本来、相対的文化価値の結晶体でしかないはずの「民族」のなかに絶対的で普遍妥当性をもった価値をみる思想傾向が、時代を風靡してきている。しかし、そこには、えてして、まだ洗練されきっていない

ない政治的ロマン主義のかげがつよく宿つたりもする⁽¹⁴⁾にもかかわらず、成熟した「民族」論ないし民族主義論は、ある種の現代性の主体的な結晶化として、相対的なものの絶対化に成功するのである。

すぐれた地域研究には、そのような二十世紀なりの歴史的現実への居直りがあるとみることできる。いや、二十世紀である以上は、歴史のほうから地域研究を現代思想の中心的磁場に引き寄せていったと考えるべきかもしれない。優れた地域研究については、そこに内在する、複雑な構図をもった、ある種の現代へ知の方程式を読み取つてみる必要があるように思う。過去の社会科学との断絶を知的に図り、そして過去の超克のうえでの新しい世界認識の論理化を行う能力………。これは、いわば研ぎ澄まされたへ知のはなれ技である。しかも、それは、相対主義を絶対化してみせるへ知の錬金術でもある。

ただ、地域研究の宿命は、相対主義の正当性をめぐつて無限に苦悩するところにある。ある地域の政治文化は、それがその有限世界だけのものでありながら、なぜ絶対の尊厳をもつか。この種の問い掛けは苦悩をともない、そしてその苦悩が苦悩として永久の煩悶になるところに意味がある。つまり相対主義をめぐる苦悩の意識が、つけ焼刃のような疑似絶対主義をともなつてぎらぎら外部に出てくるのではなしに、

むしろ地域認識を行う主体の内面世界の容積をふくらませ、そのふくらんだ内面世界に新たな、価値的確信を満たすことによって、望ましい社会科学としての主体性をよりたしかにしていっているとしたら、妥当なのである。

この点、地域研究学者の意識のなかで、どういう事柄が最優先事項と考えられているか、という、いわば「プライオリティ」の問題を問い込む必要がある。その問題は、逆にいうと、普遍主義的な政治科学の方法論に無条件でのめり込むことを控える、相対主義者なりの知的な「けじめ」を意識することにもつながってくる。自と他、個と全体、内と外、相対時間と絶対時間、愛着と客観化、文化と文明……、このようなアボリアがそこにまつわってくるはずである。

このことはともかく、地域研究は、いわば有限世界に奥深さを読み取るある種の認識論の科学である。その認識論は必ずしも政治の局面にだけ留められずに、むしろ見事に超政治的・全世界的問題意識に変わっていても当然なのである。

固有文化に対する執着は、「比較政治学」というかたちでまさに政治の相対化の試みにつながった⁽¹⁵⁾そしてその試みは、その後、たんに政治の世界だけでなく、社会や文化のほかの領域における相対的認識の手法を動員し、「世界」概念を相対化するうえで大きな契機性をはたらくことにもなったのである。

地域研究者がある種の相対主義を武器に伝統的な学風と対決する立場にたてばたつほど、社会科学の革命家としての感覚はさえていき、その結果、地域研究は相対主義の学問として成熟することになる。その場合、うまく行くと、文明論的にかなり大それたことをやってのけることにもなる。いわば、文明論という「中心」と「辺境」という図式に関して、「中心」の非中心化ということをやつてのけることになるのだ。最近では「中心」と「辺境」の問題は、文明論の独占物ではなく、政治学の重要なテーマにさえなってきた。 ⁽¹⁶⁾

比喩的に言うところ、地域研究学者はある種の言語学者でなければならぬ。しかも、すぐれた言語学者がすべてそうであるように、「特殊言語」と「普遍言語」 ⁽¹⁷⁾との区別を意識する点で感覚を研ぎ澄ましておく必要がある。そして、究極的には、たとえば作曲家のバルトークが、「マジャールやルーミアの民族音楽の旋律を「普遍言語」としての活用に耐えるかたちに変え、そして音楽の新しい語法を生み出していった」 ⁽¹⁸⁾ように、固有文化の普遍化の可能性が模索されねばならない。そのバルトークは、民族音楽を、ロマン的語法としてはほとんど用いようとはしなかった。 ⁽¹⁹⁾

地域研究において、世界は、固有文化圏で塗り分けられた多元的な世界として意識される。絶対的な中心圏は存在しない。解体の学としての地域研究は、そのおいて本領を発揮

する。しかし、解体だけが全てではない。すべて、ものは存在するだけではアイデンティティを備えることはなく、誰かが本質の規定を与えて初めてアイデンティティを得るのである。地域研究は、まさにそういう個性的なものへのアイデンティティと尊厳の賦与という作業を宿命付けられている。

地域研究の本領は、それなりの政治学を組み立てるばあいの特有の「文法」にはつきりとみられる。地域研究が、古典的政治学が本来の自律的發展のエネルギーを喪失した状況で生れた、いわば全く新しい社会科学の手法ないし知的な「文法」の体系であることは、いまさらあらためて言うまでもない。その新しい誤報ないし「文法」の体系は、第三世界の現実から内在的な社会法則として掘り起されてこなくてはならない。そして、このような手法による相対主義の科学としての地域研究は、今後ますます相対主義的認識の緻密化を図りながら、社会科学の世界で揺るぎなき存在感を持ち続けるはずである。それは、ある意味では、政治学の「開放」でもある。地域研究には、束縛、そして開放、という循環のロジックがつよくつきまとうかのようである。地域研究は、古典的政治学からの開放を成就しながら、さらなる解放を求めて、すべての「開放」のための手法を乗り越えていく面をもつ。その意味で、私達の相対主義は、つねに発展的でなければならぬ。

なにはともあれ、相対主義的状况に、正義なり、真理なりを期待する精神は現代世界においては貴重である。絶対性の論理、しかも安直に求められた恣意的な絶対性の論理は、むしろ非人間的、いや反人間的だからである。地域研究は、その意味で相対主義をもっとも有効な栄養素となしうる研究の手法であり、同時に相対主義の正当性をもっとも適切に訴えることのできる学問でもあるといえる。そして、相対主義をあくまでも正当性をもった相対主義の域に留める条件こそが、固有文化の内的論理にたいする知的な感受性である。いわゆる「文化相対主義」の意義は、まさにその点と結びついている。政治をも文化現象化し、人間をも文化的存在としてとらえる認識は、地域研究の核心的認識なのである。

地域研究の手法としてのフィールド調査は、いつけん客観主義的で、絶対の手法のようであって、その実、相対主義的な認識にしかいたらない手法である。ある村落に定着し、調査を行うことは、ことその村落については正確な情報を得ることになるが、それ以上ではない。しかし、地域研究の立場は、絶対のバイブルを書斎なり研究室なりで終生かけて読み続ける無為主義的なあり方を否定するところにある。たとえ有限の認識しか得られなくても、土のにおいのする小さな村落に住むという有限の立場を選ぶのが筋なのである。

地域研究は、今後ますますマクロ認識との緊張(20)にこだわ

る精神を培う必要があろう。ミクロ認識によってこそ、政治社会のかけがえのない現実が見えてくるのである。しかし、そこで得られた認識を、人間にとって有意性をもつ何らかの社会力学の論理に絡ませ、練りあげる作業こそが知育研究としての社会科学なのである。

三、相対の位相を越えて

ただ、地域研究がもたらした成果が皆無であったわけではなく、そのひとつは、たとえば「国家」現象についての問題提起であった。従来、ヨーロッパ型の主権国家論を前提としていた国家主義的政治学にたいして、一方において機能主義的政治学がひとつの挑戦を加えてみせたが、他方、地域研究が、それをはるかに越える規模で、第三世界における多彩な「国家」現象を実証的に示し、そのことによって、「メタ国家状況」ともいうべき未来の政治状況まで示唆してみせた貢献は大きい⁽²¹⁾最近の政治発展論においては、国家論が、国家を超克する議論として語られているのである。⁽²²⁾

しかし、近代国家の理論的な解体作業は、それに代えて柔軟な「場」の論理を社会科学に導入する契機ともなった。アンソニー・スミス(Anthony D. Smith)は、「国家は近代的産物か」という問い掛けのもとに、「国家」に代えて「エスニ(ethnie)」概念を政治の基本的な「場」として提示して見せ

ている。「エスニー」は、神話と象徴を基軸とする種族的共同体であり、統治は「神話的動因(mythotoneur)」を中心に展開する、という⁽²³⁾この議論は、アームストロング(John A. Armstrong)の『ナショナリズム以前の諸国家』で展開された注目すべき議論にもつながるように思う。⁽²⁴⁾

いったん解体された「近代国家」は、限りなく要素分解されていく。スミスのいう「エスニー」における文化的現象としての政治こそが政治現象である、という通念が強まることにもなる。いわば、政治の文化化が理論的に図られるのである。ただ、政治の文化化を図りながら、政治発展論自体が本来ポレミークの学である政治学の使命を見失っていくことにもなる。その意味では、モチーフとしての「国家」の喪失は、政治認識の面での大きな代償にもつながるのである。

むしろ、アンダーソン(Benedict O.G. Anderson)が、シートン・ワトソン(Hugh Seton-Watson)のつくった概念「公的ナショナリズム(official nationalism)⁽²⁵⁾」を第三世界の政治風土と結びつけることによってより効果的に生かしてつかってみせた例⁽²⁶⁾が示すように、なんらかの理論操作によって「国家」を再構築しようとした事例がないではない。また、「国家」という概念を用いないまでも、たとえば「固有体制」というモチーフを提出することもできよう⁽²⁷⁾それにしても、国際法的な主権国家概念から遠く離れたところで世界認識の基礎単

位を構築しようとする点で、最近の地域研究は共通した傾向をみせてきている。

それは、「メタ国家状況」を人類の未来に指し示したという点でも知的には称揚されるべき発想ではあった。そして、第三世界の政治および歴史の現実をみるうえで、ヨーロッパの偏見を克服して望ましい現実認識の枠組みを提供した点でも望ましい貢献であったといえよう。しかし、そこに危険な徴候がなかったとはいえないようにも思う。

政治学的観点からみたとき、危険と斬新な発想との区別がいわば紙一重であるともいふべき事態がないわけではない。

たとえば、すぐれた人類学者であるギアツ(Clifford Geertz)の代表作『ヌガラ』や『地方的知識』などは、政治の非政治化につながりかねない特質を秘めた作品である。²⁸⁾『ヌガラ』で展開された「劇場国家」の理論は、支配者と非支配者との対峙しなかつた演技の所作を共有するという視点を出すことによって、政治固有の支配と服従という契機を薄めてみせたのである。また『地方的知識』は、あらゆる知的認識をここでいう「エスニー」の枠のなかで完成させるといふ発想である。ギアツの言葉を引くと、「航海や庭づくりそして政治や詩とおなじく、法と生態誌は場所に関するわざである。それらは、地方的知識によって機能するのである。」²⁹⁾かりにそうだとすると、すでに指摘した政治の文化化の代償とどう取

り組むかが、文化相対主義的な傾向に毒された政治発展論にとつての重要な課題であろう。政治は、そもそも地方化Ⅱ文化化されていいのだろうか。

したがって、文化科学の課題は、一方において限りなく解體Ⅱ文化化され、相対化されていくへ土着なるものを、常に普遍的の相に引き戻し続けることなくしてはならない。世界認識が本質的に相対主義的でありうるかどうかについてはまだ確定的な解答はないにしても、社会科学、文化科学は、相対主義が先天的に秘め持っているある種の危険については身構えておいて当然であろう。相対主義は、悲劇を悲劇と表現できず、非人道主義をそれと規定できないというふうな危険を秘めているのである。

相対化されたものの普遍化の手続としては、まず基本的には限りなく分断され、細分化されかねない〈場〉の論理の修正からはじめられるべきであろう。さしあたっては、政治現象の展開する〈場〉を文化的な〈場〉から歴史的・社会的な〈場〉へととらえ直す作業が必要であろう。社会現象を土着文化のカプセルから解放し、それ本来の役割にもどさねばならないのである。

その際、社会的行為の主体としての人間にしても、人種、種族、部族あるいは民族の一員として、いわば部族的・文化的アイデンティティの持ち主という側面が強調されるかぎり

は、必ずしも普遍的な価値の担い手ではありえない。意外なことではあるが、文化主義的な社会科学の最大の欠陥は人間論にあるのである。

つまり、たとえば政治的創造の主体としての政治的人間というモチーフを指定できないところに、文化主義的理論の限界があるといわざるをえない。

その点、たとえばポプキン(Samuel L. Popkin)は、たとえノーマン・フロリック(Norman Frohlich)らの理論的影響を受けながらも、第三世界を素材に、「合理的農民(the rational peasant)」というモチーフを提出することによって、文化主義的アプローチでは提出できないような政治的人間像を概念として指定してみせている³⁰⁾人間の本质を文化的アイデンティティから政治的意思の主体へと転換させることによって、重大な問題提起をしてみせたのである。これは、いったん相対化されたものを普遍化する手続きとしては、大きな前進であったといえよう。

問題は、人間論だけではない。時間論にしても、普遍的に共有される時間に代わって、固有文化のなかに内在する時間という考え方が唱えられたりする。このような内なる時間と「外なる時間」という発想は、それはそれなりに社会発展の問題を考えるときに意義深い考え方はあるが、そのことによって第三世界の直面する諸問題がごとく世界化され

ないことになってしまう。第三世界を再び世界史的な場に位置づけるためには、このような時間感覚の止揚にまで目配りする必要がある。

近代化理論の主唱者であったアーモンド(Gabriel A. Almond)でさえもが、政治発展を歴史科学に戻すことを発想した時期がある。すなわち、政治発展論の致命的な欠陥としてふつう指摘される二つの点、つまり世界Ⅱ普遍感覚の欠如と歴史Ⅱ時間感覚はいずれもその通りで、このことは本来政治学の埒内に留まるべきであった政治発展論が、政治学本来の使命を見失ってしまったことを暗示するのである。没価値性のたてまえのもとでの価値放縦性すらも許しかねないところにまで、文化科学に毒された政治発展論は墮落を遂げてしまったのであった。

もし地域研究が今後たんなる文化科学の域を抜け出て、歴史科学への転回を遂げねばならないとしたら、まずなによりも歴史としての近代への視点を求められることになる。それは、すでに裁かれた近代化論とは本質的にちがう視点である。それは、新しい世界史的政治状況を生み出した巨大な歴史変動の過程そのものを意識することではなければならない。

そのばあいの歴史認識は、ある意味で、近代から現代にかけての歴史展開を巨大なカストロフィーの展開過程としてとらえる見方につながることになる。なぜなら、第三世界の

視点からしたら、近代史の展開過程は本質的にカタストロフイックであった、という発想が求められることにもなりかねない。

いずれにしても、歴史的現実そのものとの取り組みこそが地域研究の中心課題であるべきだということが、文化主義者までふくめて共通の了解事項になる時代は、もう目前に迫ってきているように思えてならない。なぜなら、とくに十九世紀から二十世紀にかけて世界をしぼった不条理な政治の論理からの解放こそが、現代世界の政治発展の実質を形づくった歴史的現実そのものであるからである。相対の相を超える普遍的相の目配りをもたない地域論は学的正当性をアプリアリにもちえない、という言い方さえできるかもしれない。

四、おわりに……歴史の意味……

地域認識を文化主義＝相対主義の相から、より普遍的な位相の認識に切り換えるべきことと述べたが、ただそれは、在来の歴史科学への回帰を示唆するわけではない。これまでの歴史科学は多くの問題を露呈しているのであって、歴史学によって文化主義的手法の正当化をはかることができるわけではない。

歴史の主役であるその土地の人間にとって、よそ者がつくりあげた歴史哲学がどういう意味をもつかは考えてみる必要

がある。ある地域の人間は、あるいは「山の民」あるいは「海の民」としてこの土地にはいり込んできたのであり、かれらがつくっているそれぞれの居住空間の意味空間が固有の時間の観念と価値観にしたがって、固有の歴史を織りなしているのである。だから、歴史はけっして単旋律的には書けないし、よそからもち込んだシェーマで解けるわけでもない。また、自然環境への適応に明け暮れてきた人びとにとって、歴史は、どう発展的でありうるかは大問題だろう。

ということは、とりもなおさず、わたしたちとしては、これまでの歴史学の貧困を意識しなくてはならないということである。といっても、人間不在論などという手垢にまみれた歴史学批判のことではない。そんなことは、もういまではとつくに常識になっている。

歴史学の貧困の一因は、歴史が客観的に描けるはずだという楽天的な思い込みにある。歴史学というのはたしかにある地域の主体性意識の成熟を相関するすぐれた知的作業である。しかし、客観的な歴史を書くことをめぐる問題はあまりにも多い。フランスのいわゆる「アナール（年報）派」のように、歴史の客観化をめざして、人口学、気象学、計量経済学、数量統計学、病理学などを、歴史学と不可分に結びついた隣接領域と考える学派もあらわれている。しかし、歴史学から、主知主義の意味づけ、わかりやすくいうと主観的な語りとな

ろうか、そういう側面を削ぎ落とすことは不可能だろう。

というより、歴史的意味づけの主体を歴史学者だけにきぎるのは、いわば非現実的な考え方である。歴史学者が仲間うちだけで批判しあうことが歴史の客観性の保証である時代はもう終らねばならない。歴史学的感覚をもつのはもはや歴史学者や知識人だけではない。政治家や一般市民、その土地の住民、そして社会的あるいは国際的「通念」というえたいの知れない主体までもが歴史解釈の責任を分担する時代なのだ。歴史認識がますます墮落しかねないこういう状況のなかで、人間知性の成熟にふさわしい客観的な歴史観を固めることは実にむづかしい。とくに、一方で、それぞれの文化空間固有の歴史感覚を尊重しながら、反面で「通念」とたたかうという、いわば二律背反的な知性の任務はたいへんである。

歴史的現実とはなにか。それは、普遍的な法則性をもつものでもなければ、着実に進歩するものでもない。時間の軸で説明できそうであって、それを超えた面ももっている。そして、なによりも、それは、客観的にそこにあるかのようにあって、主観的にうちにもあるのだ。それは物理的現実でありながら、ことばで描かれてはじめて現実化するものでもある。しかし、それだけではない。歴史的現実是個性的な顔をもたねばならない。ある哲学者が「理性の七花八裂」という表現を用いたことがあるが、歴史的状況とはまさにそのような

ものであって、無理して一元的に描くことができないほど多様なのである。そういう歴史の個性的な顔をそれなりに描く方法で、わたしたちはもつと苦労しないといけない。

ただ、だからといって、歴史を人間のエコシステムへの適応と主体的進化のプロセスの物理的描写にとどめないで、詩的直観や文学的洞察の次元にまでもつてきて主観的要素を加味したとしても、ほんとうの主観は歴史学者のそれではなく、歴史を生き、それをつくった主体の主観であり、意思であるというネックをかならずしも解くことにはならない。要するに、いま問われているのはあらたな歴史認識の視座なのである。それはどうやら自ないし個の視点、他の視点、そしてその双方をくるみ込むトータルな視点、そしてその三つの視点それぞれが歴史を生きる側のものと歴史をみる側のものとに分離するという、実に複雑な、いわば立体的な視点の体系が模索されねばならないようである。それでいて、このような視点の体系は、けっして思弁的な観念論になってはならず、歴史的現実を説明できる学的体系でなくてはならないのだ。

なにはともあれ、「地域」史という意味での歴史を書くことはむづかしいように思う。国民国家の形成、出来合いの時代区分、階級史観、普遍的発展法則などの便利な歴史学の枠組みはもうさしあたって関係ない。歴史のなりたちを考えると、通念にこだわらず、たとえば気象史、自然環境、人口の

流動と凝集定着、植生の人口支持力、農業技術史、衣食住の様式、社会組織原理、宗教、王権思想、都鄙の問題、法制史、文化摩擦、戦争、機械技術と兵器、病気などいろいろな局面を考えるのがだいじだろう。しかし、その域を超えて、言語体系、認識論、宗教的思考様式の変遷、呪術、神話と民話伝説、儀礼、知性主義の軌跡、芸能芸術史における人間像、世代観意識の落差、潜在意識と記憶、心理、精神病理をめぐる社会的通念、そしてなによりもその空間固有の自意識と歴史感覚などにまで切り込まないかぎり、世界、とくに第三世界における「地域」史は描けないだろうと思う。そして、歴史はもはや時間ではなく、さまざまな要因が有機的に連関しあう複雑なダイナミズムないしプロセスそれ自体になる。そして、そこでの変化発展、これをかりに歴史的ダイナミズムという、そのなかから、集散、定着、制度化、合理化、緊張化、統合、発展、本質的変容などの諸局面でどういう傾向がみられるのかを確認する手続きが肝心なのである。

最後に締めくくりとして、日本について、これはあくまでも学者としての感じではなく、一日本人としての実感というものだけ述べて、問題提起を終えたいと思う。

日本という国は非常に不思議な国で、日本という漢字が突如現れるのが七世紀の中期頃だが、この二文字がどの民族、

あるいはどの人種の名前でもなく、また当時存在したどの地域の名前でもない、あるいはないであろうということは、非常に面白いと思う。どういふことかという、日本という二文字が、具体的にどう使われたかは別として、やはり現実に存在しない概念であつたということである。私は、詳しいことは知らないが、そういうふうには了解している。

現実に存在しない概念というのが、国家ないしはある政治組織の名前になるということは意外に珍しいケースで、えてしてそういう場合にどういふことになるかという、「日本的なるもの」を造りあげていこうとする、いわば芸術的な統合過程、インテグレーションの過程が働きはじめるということとおこる。非常に似たケースとしては、歴史的に非常に新しい二十世紀の中期に発生したケースであるが、インドネシアというケースがあり、これも人工的に作られた国名である。

現実にインドネシアという言葉もないし、民族もない、場所もない。案の定、インドネシアにおいても、「インドネシアというもの」を造りあげていこうとする統合のプロセスがはじまった。何世紀かたつと、おそらくそういう国の場合には、いわゆる同質性が非常に強い、均質性の非常に強い国家として、芸術品が完成していくのである。

日本はまさにそのような歴史の展開をとげてきたわけで、では日本という芸術品がいつ完成したかという、どうも昭

和十年代でありはしないかと、私は思っている。だから、日本人は、日本国内をいかに日本的にするかに専念してきたわけで、いまだにその性を持っている。外国の方から見ると、日本という国は不思議な国だ、近代国家でありながら鎖国的メンタリティーが抜けない、と言われるのは当たり前なのである。普通の国家というのは大体隙間だらけのガタガタした国家であるわけで、そういう国家にどのようにして変えていくかというのが、これからの作業であって、おそらくその作業が国際化なんだろうという気もする。七世紀中期から今日の二十世紀にかけて営々つくりあげてきたこの芸術品を、わすレガタガタにするというのは難しい作業だと、私は思っ、て、悲観的ではあるが、それが日本人としての日本についての所感である。

- (1) Julian H. Steward, Area Research Theory and Practice, Social Science Research Council Bulletin 63, 1950, p. 7.
- (2) cf. Michael Brecher, "The Subordinate System of Southern Asia," World Politics, Vol. XV, no. 1 (Jan. 1963), pp. 213-235; Leonard Binder, "The Middle East as a Subordinate International System", World Politics, Vol. X, no. 2 (Apr. 1958), pp. 408-429; George Modelski, "International Relations and Area Studies: The Case of

South-East Asia," International Relations, Vol. II, no. 2 (Apr. 1961) など、多くの学者がまったく無邪気に「地域」を「従属体系」と合致させてひとまとめに論じていることがわかる。

- (3) 「地域(an area)」について、Norton Ginsburg, "Area," International Encyclopedia of the Social Science, Vol. I, 1968, pp. 398-401 が有益な分析をなしている。

(4) 最近では、「地域」が先天的の所与としてあるのではなく、歴史的に形成されていくという考え方を打ち出す見方が主流となつてゐる。cf. Donald G. McCloud, System and Process in Southeast Asia, the Evolution of a Region, 1986.

- (5) Harold Orlans, "The Political Uses of Social Research," The Annals of the American Academy of Political and Social Science, Vol. 394 (Mar. 1971), p. 28.
- (6) Robert Packenham, "Political Development Doctorines in the American Foreign Aid Program," World Politics, Vol. XVIII, (January 1966), p. 213.
- (7) Dennis J. Duncanson, "From Scholarship to 'Psy-War' in the Vietnam Story," Pacific Affairs, Vol. XLIV, no. 4, pp. 591-595.
- (8) 言語学のみならず、政治学についても有効

な示唆を与え、いわゆる「政治言語学」の基礎を提供したものは少なくない。ちなみに、ひとつの例を以下にあげておくことにしよう。「言語は、シンタクスの面での落ち着きにもかかわらず、いわばプラグマティックな傾向になると爆発する。言語は、ここにおいてその人間的使用者と直接結びつき、そして、日常言語の場が、命令と要求、勧告と抑圧、評価と事実性(matter-of-factness)をもって可視的になる。」(C. A. van Peursen, "Language and Politics", *Extraits de European University Institute*, 1982, p. 42.)⁽¹⁾ 中には、チャールズ・モリス(Charls Morris)の"syntax", "semantics", "pragmatics"の三分法の影響がみられる。

(9) 社会科学の抽象概念が社会的現実と対応性をもたない事実を批判するものとして、Louis Dumont, "On the Comparative Understanding of Non-Modern Civilizations, *Daedalus*, Vol. 104, no. 2 (Spring 1975)がある。

(10) 政治現象の多元性についての議論の基礎として、社会学でつとに議論されている社会＝文化発展の筋道、たとえばホワイト(Leslie White)の普遍的進化論、スチュワード(Julian H. Steward)の多線的進化論などに始まるさまざまな理論的系譜を踏まえておくことは必要だろう。

(11) Joshua A. Fishman, *Nationalism and Language*, Two

Integrative Essays, 1972, p. 44.

(12) 「普遍主義」か「相対主義」かをめぐる最近の議論としては、Earnest Gellner, "Relativism and Universalism", in Martin Hollis & Steven Lukes(ed.), *Rationality and Relativism*, 1982, などが得られる。もっとも、ゲルナーは、「相対主義」を知的アナキーにつながるものとして否定的にとらえている。「普遍主義」と「相対主義」の双方を妥協する立場として、A. H. Somjee, *Parallels and Actuals of Political Development*, 1986, がある。

(13) 二十世紀のナショナリズムについては、Anthony D. Smith, *Nationalist Movements in the Twentieth Century*, 1979.

(14) ナショナリズムの非合理性を心理学的に分析しようとした作品として、H. D. Forbes, *Nationalism, Ethnocentrism, and Personality, Social Science and Critical Theory*, 1985, がある。

(15) もっとも、「比較政治学」は、現在大きく後退しているといわれる。それは、ひとえに、画一性で政治現象をとらえようとすると中途半端な非相対主義的感覚が残存したことによるものであった。相対主義を徹底させたばあい、「比較政治学」自体がどのような論理体系として成立するかはまだ未知の課題であるといえるかもしれない。cf. Howard J.

- Wiarda(ed.), New Directions in Comparative Politics, 1985.
- (16) 〈中心〉と〈辺境〉の問題は、一九七八年一月にパリで開かれた世界政治学会政治地理学委員会主催の特別シンポジウムの主題として取り上げられたこと。cf. Jean Gottman (ed.), Centre and Periphery, Special Variation in Politics, 1980.
- (17) 「普通言語」に「つば、P・ロミン」清瀬卓訳『普通言語』図書刊行会、一九八四年参照。
- (18) 矢野暢『二十世紀の音楽』一九八五年、八九頁。
- (19) cf. Stanley Sadie(ed.), The New Grove Dictionary of Music and Musicians, Vol. 2, pp. 197-225.
- (20) トクロ認識、ミントロ認識に「つば」cf. Heinz Eulau, Politics, Self, and Society, A Theme and Variations, 1986, pp. 92-107.
- (21) cf. Ali Kazancigil (ed.), The State in Global Perspective, 1986.
- (22) 矢野暢『国家感覚』一九八六年参照。
- (23) Anthony D. Smith, The Ethnic Origins of Nations, 1986, pp. 13-16.
- (24) cf. John A. Armstrong, Nations Before Nationalism, 1982.
- (25) Hugh Seton-Watson, Nations & States, An Enquiry into the Origins of Nations and the Politics of Nationalism, 1977, p. 148.
- (26) cf. Benedict O'G. Anderson, Imagined Communities, Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, 1983, pp. 80ff.
- (27) 矢野暢前掲書 四四-五三頁。
- (28) Clifford Geertz, Negara, The Theatre State in Nineteen-Century Bali, 1980, Clifford Geertz, Local Knowledge, Further Essays in Interpretive Anthropology, 1983.
- (29) Clifford Geertz, op. cit. (Local Knowledge ……), P. 167.
- (30) Samuel L. Popkin, The Rational Peasant, the Political Economy of Rural Society in Vietnam, 1979.
- (31) cf. Gabriel A. Almond, R. A. Mundt & C. Flanagan(ed.), Crisis, Choice and Change : Historical Studies of Political Development, 1973.

コメント パトリシア・スタインホフ

私にとって、最も印象が強かったことは、矢野先生が一度も日本という言葉をお使いにならなかったことです。多分地域研究の第一の感性として、原稿には、矢野先生がお示しになったように、地域という概念それ自体の非現実性と同じように、日本という概念も現実性を持っていないと考えられます。ある意味ではそれはそうですが、この点に後で戻りたいと思います。

その前に、もっと広い意味で、疑問として、矢野先生の地域研究についてのビジョンをどういうふうな日本の地域研究に与えるかという質問を考えさせていただきます。

まず第一に、日本の地域研究の政治化という問題です。これは、二つの面があると思います。矢野先生が例にした東南アジアの地域研究の政治化が、割合に最近、二十年か二十五年前からのことですから、この部屋に集まっている人たちにはみな記憶がまだ新しいものだと思います。しかし、外国の人にとっては、日本の地域研究が政治化された伝統は、もっと長いのです。四十年から五十年前のことです。まだ昔話にはなっていないのですけれども、現在特にアメリカでは政策科学という意味で日本の地域研究の政治化は、学者にとってそれほど問題ではないと思います。そのかわりに、現在の現実的問題の圧力は、経済とビジネスのほうからきています。結果は似ているけれども、原因は違うので、その現象も少し違います。アメリカだけでなく、世界全体の目が日本経済の成功と日本の財政力のほうに集まっています。これは、戦争や冷戦の圧力と同じように、日本の地域研究を狭くしたり、偏らせたりしていると思います。

もう一つの面で、現在の経済状態が日本の中にも日本の地域研究を政治化させているのではないかと思います。四十五年前には、ベネディクトが、なぜ日本人がアメリカに対して戦争をはじめたかという現実政治的な疑問を出して、日本文化人類学に説明を求めまし

た。それと同じように、現在なぜ日本人が経済で成功しているかという現実的な疑問を出して、日本文化に説明を求めています。両方とも問題だと思います。この問題は、矢野先生がお出しになった地域研究の相対性と普遍性の問題と関係があると思います。地域研究は、分割体制の科学であって、フィールド・ワークが特徴的な手法であるとおっしゃいましたが、その方法論には大事な前提が隠されています。研究の対象である人間が、自分の人間関係、考え方、心理と文化を割と生で、自然的に、純粹な現象として研究者に表現している場合に、そのような理論なしの非理論的な手法は、意味があるでしょう。

しかし、日本の場合は、日本人自身が、自分の文化、自分の社会構造、自分の思想を深く研究したり、自分の非常に魅力がある説明をしたりしています。この場合には、外人の地域研究者にとって一番やりやすいことは、そのできあがった説明を借りて、自分の目で見たい現象と合わない点を無視することです。矢野先生の分析には、地域研究と社会科学がある程度までは、一貫しているものとして扱われていますが、別々にわけたら、この問題を越えることができると思います。

普通は、アメリカの使い方では、ある程度までは矢野さんの使い方とは違いますけれども、一般的には地域研究ということはいろいろな分野の面から、ある地域を勉強するという意味を、具体的には持っている。文化を理解するためには、どんな一つの専攻でも、歴史学でも、狭すぎるので、その弱点を超える方法が地域研究と言われています。たとえば、学生の場合は、文学、政治学、文化人類学、歴史学、哲学、社会学の別々の面で日本を勉強するということは、日本の地域研究になります。こういう方法で、現代社会科学と文化人類学の特定の認識が、矢野先生の新しい政治学にも見られます。けれども、いろいろの分野を深く勉強することはとても時間がかか

どうもありがとうございました。確かに日本文化研究センターは国

るので、日本についてのことだけを勉強することが普通です。

その結果、どの分野の方法論も十分習いません。ある分野の方法論をしなければ、その研究結果を批評することができません。日本の地域研究だけを勉強すれば、日本で見られる現象は、特に自分の文化と違っている現象は、日本の特徴として見られやすい。日本人のその特徴についての説明は、妥当に見えます。しかし、社会科学は、この意味の地域研究と違って、方法論もほかのところから集まった研究の結果もあります。普遍的な理論を別にしても、その科学の知識体系は、日本を理解するための材料として使うことができると思います。

方法は、レヴィ・ストロース先生が水曜日の講演で、日本のミトロジエを分析した方法と同様です。最初は日本の現象をほかの例と比べてどれほど普遍的な形を持っているかということを考えて、それから残っている部分だけを文化的な特徴として扱うほうが社会学的な方法だと思います。はじめから日本の現象を全部日本文化の特徴として分析しようとするならば、上手な分析をすることはできません。が、ある意味では、日本人の人間性と日本文化の普遍性を無視する可能性があります。それではよい社会学でもないし、よい地域研究でもありません。

矢野先生と同じように、私も地域研究の相対性とその手法が社会科学を解放することを希望します。しかし、日本の地域研究の場合には、存在している社会慣行を無視して、日本特有の日本人論的な説明を作る方法から、この結果が出てこないと思います。むしろ西欧の社会科学の理論と概念が足りない場合は、日本の例を強く社会科学者の目の前に出して、どうしてこの理論が日本に当てはまらない

か、理論固有の弱さではないかというふうに論じなければならぬと思います。そうしないと、いつまでも日本は例外と思われるし、社会科学は普遍的な科学になりません。日本の特徴を含めている社会科学理論を作らなければならないと思います。

最初のコメントに出した日本という概念は現実性があるかどうかという疑問に戻らせていただきたいと思います。日本の地域研究にラジカルな相対主義を与えると、もちろん日本という概念は一貫しているものではありません。時代の変わりもあつたり、現在の日本ではいろいろな地域的な社会が自分のミニ文化を持っています。日本文化の分析が、普通はこの違いを無視して、日本全体に与えるような説明を作る傾向があります。この意味で、日本という概念は現実性がありません。本当に日本全体、日本全員に当てはまるはずのない分析をする場合は、日本のどの部分とどの日本人についての話をしているか、もっと詳しく言ったほうがいいと思います。そのために将来の社会科学の研究には、日本の裏、いままで無視されている社会問題、例外的なことも研究しなければならぬと思います。

さて、矢野先生のご意見は、どのように日本の地域研究に当てはまるかという疑問からはじまって、三つのことについて申し上げます。地域研究の政治化の問題、地域研究と社会科学の違いと、日本という概念の一貫している現実性、その三つの点は、日本人論という現在の文化的現象に関係があると思いますし、従って国際日本文化研究センターとも関係があると思います。そのために、日文研の名前に入っている国際という言葉は、いろいろな意味で大切な概念だと思っています。

際という名前を持っているわけですが、それだからこそ今日は国際的な集

まりをして日本のことを考えていると言うことができると思います。それでは、いまの矢野先生の発表およびスタインホフ先生のコメントに對しまして、皆さんのほうからご意見なりご質問なりありましたら、どうぞご自由におっしゃってください。

上垣外 矢野先生に一つお聞きしたいことがございます。実は私、東京大学の教養学科というところで勉強したことがございますが、これは一応地域研究というところを銘打っている学科でございまして、私はそのドイツ科に属していた。つまり、独文科とかドイツ哲学ではなくて、いわゆる地域研究のドイツ科というところに属しておりました。学生としてしか私は地域研究に接してないですが、そういうことを勉強したかといいますと、あらゆることをやらされたわけです。ドイツの哲学、ドイツの音楽、ドイツの思想史、ドイツの政治、ドイツの社会、全部やらされた。

どうも、教育としての地域研究、あるいは総合としての地域研究というのが、本当に可能であるのか、いまだにバラバラな専門分野の寄せ集めでしかないのではないかということを思うのです。日本の研究体制が遅れているからなのか、あるいは世界中そうであるのか。僕は世界中そうではないかという気がしているのです。地域研究における学際的な研究ということとは、理念としてはまことにものともないますね。やはりドイツのことを知るためにはドイツの音楽も重要だと思えますし、ドイツの経済も重要だと思えます。しかしこれを総合するということは、実際問題としては本当に困難なので、むしろ理念の問題ではなくて実践の問題だと思うのです。いかにしてそういうことを総合していくか。全部総合できたら非常にいいことだと思うのです。それが一つ。

もう一つ、矢野先生は、文化科学という言葉が頻繁にお使いになりましたけれども、日本ではあまり文化科学という言葉は、私は聞いたことがない。私が思いつくのは、ヴェンデルバントのクルトールピッセンシャフトという概念しか思いつかないのですが、その意味でお使いになったんでしょうか。それから、文化という言葉もずいぶんお使いになりました。たと

えば、政治と文化、経済と文化というふうに対立概念のごくおっしゃいましたけれども、政治や経済と対立的にあげられた先生の文化という意味は一体どういう文化であるのか。私には、宗教とか芸術とか、あるいはザ・ウェイ・オブ・ライフとか、あるいは日本人が一般的に共有しているような普通のものの考え方というのですか、そんなようなものかしらんと思ったのですが、その点はどうなのでしょう。

矢野 文化の問題を議論するときに、それぞれの学者が背負っております文化的背景というのがもろに出てまいりまして、一番ややこしいのが、ドイツ的な文化を背負われた方との議論でございまして、ドイツだけはどういうわけか非常にユニークな文化の概念を持っておられまして、ドイツ語のクルトール以外何者でもないわけでございます。これは、世界ではむしろ珍しい文化概念だというのが私の個人的了解でございまして、その方々と、私は議論しないことにしていると云ったら言い過ぎでありますけれども、話が合わないでございまして。つまり、ドイツはなぜか、クルトールという概念が、日本においても文化という形で翻訳されて、ドイツ的な形で入ってきて定着していますからわからんわけじゃないのですけれども、どちらかというと、私もカルチャーと言うときにはそれ以外の文化圏できた概念を使っております、かなり違うのでございます。

文化科学というのは、何もドイツの学者が一時使ったような意味で使っているのではないのでありまして、文化主義的な手法というものを、カルチュラルイズムというものを表に出した方法論のことを、私はまとめて文化科学と言っておるわけでございます。それは、私どもの了解では、政治学とか経済学の伝統とはかなり違ったものであるというふうに言えるかと思えます。そういうふうにしておりまして、私がお答えするより、議論として出したいだいたいがいいんじゃないかという気がするわけです。かなり大事な問題ではあります。

河合 教育のことを少し言われましたね。地域研究という場合の教育とかインテグレーション、総合というのをどうするか。非常にこれも難しいで

すが。

矢野 これはおっしゃるとおりで、インターデイスシブナリーということをよく言うのでありますけれども、不幸なことに、成功した例は非常に少のうございます。地域研究をやっております私どもの職場、京都大学東南アジア研究センターですけれども、まったく同じ悩みで二十五年やってまいりまして、一番面白いことは、へんな話ですけれども、人事がかなり熾烈になるということです。あいつはうちの学風に合わない。はずせという形で、かなり露骨な「文化摩擦」が、所内で生じまして、その人事が異端分子をはずす形でうまくいったときにはすばらしいインターデイスシブナリーな研究所になります。しかし、人事がうまくいわずに異質分子を残したときには、おっしゃるとおり、バラバラの、まったく同床異夢の、違った方法論と、違った価値観が併存するという不幸な状況になるわけであります。同じ釜の飯を食うというフィールド体験をとにもするという条件があるとか、同じ大学を卒業して同じような学風を身につけているとか、学問的な要素が非常に大きくなりまして、かなり問題があると思います。私は何を言わんとしているかという、あんまり理想的にインターデイスシブナリーとかインテグレーションなんて言くと、そのためにエネルギーが費やされまして、実際優れた学問はできない。むしろ楽な学問をしようと思ったら、個人の自由にまかせてほっといたほうがいいということになるんですね。あくまでも経験的に言くと、そういうことだ。私がもろに苦しんでいるものだから、そういうことになる。

上垣外 私、別にドイツ式のクルトールの概念がよろしいというふうに思っておるわけじゃないのですけれども、たとえば文化人類学、特に未開社会とか原始社会の文化、生活あるいは思考、すべてを含めたものとしての文化というのはよくわかるんです。ですが、近代的な国民国家、特に十九世紀以後の国民国家が成立した以降の、あるいは先生は政治的な主権国家とおっしゃるかもしれませんが、非常に大きな人口を持った国家の場合には、やはりそれではすまないわけですね。全部が文化である。そう

すると、政治も文化であり、経済も文化である。

ところが実際には、社会の組織としましては、政治は政治、経済は経済、宗教は宗教、あるいは教育は教育、そういうふうな、社会構造的には一応の分節化がなされているわけですね。その分節化された社会の各部分について、社会科学というものが成立しているわけですね。政治学、経済学、宗教学、その他。それでは、先生のおっしゃった文化科学というのは何を対象とするのか。

矢野 私は、文化科学というものを、研究者のある価値的スタンスとしてとらえておるわけでありまして、あらゆる現象、政治現象であれ経済現象であれ、それをカルチュラリズムという手法で解こうとする。政治を見ても、普遍の政治の相でとらえるのじゃなくて、これは日本の政治の形だ、これは政だというような手法でございます。そういう、ことごとくものとを文化化していく、文化的にとらえようとするスタンスのことを、私は文化科学と言っているのでありまして、それは「科学」という名に値するほど強いし、現実にもそういう手法があるし、政治学の中にも経済学の中にも、現にそれは強く存在しております。彼らは、その手法こそが科学的であると言っているわけでありまして、だから私は文化科学ということをあえて言うわけであります。これは社会科学、ナントカ科学を貫くスタンスとしての、いわゆるクルトール・ビッセンシャフトとは違うのでございいます。

上垣外 七世紀の日本ということですが、言語というのはすべてそうだと思うのですが、地域の呼び方、あるいは国の呼び方、民族の呼び方というのも、当然ほかのものと比べてみるから差異がはっきりしてくるということですね。たとえば、昔は、倭人という言い方にもいろいろ異なる異論があるかと思いますが、我々「魏史倭人伝」しか読まないですね。ところが、あれは「東夷伝」という中に入っております。それから「魏史韓伝」というのがお隣にあるわけです。やはり、並べ方としては、韓人と倭人という一つの対立概念がありまして、それは中国人の認識なんですね。その場合、や

はり倭人と韓人というのは中国人によって区別されて認識されているのです。

日本ということも、「旧唐書」に「日本伝」という名前で入っているかと思えます。それは中国人の地理概念としましては、やはり朝鮮半島の諸国とは別の地域を明らかに指している。あるいは別の民族を明らかに指しているわけですね。そうしますと、つくる過程では芸術的な何々があつた。新しい言葉が作られる場合には当然そういう芸術的と言つていいのか、一種の創造力の働きのほうはあると思ひますけれども、少なくとも七世紀、それほど下らない時期に、少なくとも中国人の地理の概念の分け方の中には、日本というのは一つの実体として存在していると受け止められているということは事実だと思ふのです。

先生は、日本というものの実体が、やはり七世紀時点においては、民族的統合がまだなされていなかったとお考えであるわけですね。

矢野 そうです。私は中国の話をしたのではないのでありまして、日本が主体的に国名を選んだ。そして日本が主体的に選んだモチーフ、外からだけのレッテルに甘んじなくなりまして、日本が主体的に自分たちのモチーフとして国名を選んだ。その二文字が「日本」であつて、中国でどう使われようが、中国人が倭人と言ひ、日本という言葉を使つたということ、いま私が言つた意味とは全然違ふわけでございます。そういうのが理念的モチーフとしてその後機能したということを、私、申し上げたわけでございます。

ご指摘のとおり、当時の状況というのは非常にハイブリッドな状況でございます。私専門家ではありませんし、むしろプロの方がいろいろご議論なさつたらしいと思ひますけれども、ハイブリッドな状況において、そういうものがモチーフとして定着して、結果として芸術品ができちゃつた。そこに、私は、一市民としてたいへん面白いものを感じるといふことでございます。

梅原 私は、聖徳太子について四冊の本を書いておりますので、いまの日

本の国号の起源ということを長い間考へていたのですけれども、どうもいろいろな状況から考えますと、やはり聖徳太子によって日本という国名および天皇という日本の支配者の名称が作られたのじゃないかということを推定させる資料および状況証拠が多いんです。それはやはり、日本、日の本というのは東という意味ですから、西の中国に対してたいへん強い、対中国的な一つの国家意識を持つた言葉であるといふふうに、私は思ふのです。

日本ということについて、実は日本というのは蝦夷の国の名前だつたといふたいへん興味深い説が、高橋富雄さんによって出されてますが、ヒダカとかヒダカミという蝦夷の国名を逆に日本の大和朝廷が自分のものにしたといふことです。そうすると、依然として、中国に対して、しかも中国の真似をして律令国家を、大和朝廷ばかりか蝦夷を含めた一つの律令国家を建設するといふ理念でつくられたといふふうに思われる。

天皇という言葉もついでに申し上げますと、皇帝に対してつくられた言葉といふことは明らかでありまして、皇帝は天の命令を受けて全世界を支配している。たまたま辺境にある民は、皇帝の力が及ばないので、支配をまかせてナントカ王といふことにしているんだといふ考え方が中国では強いわけですが、そういう考え方に対して、日本の王さまは天の王さまだ。だから地上の皇帝の支配は届かないんだといふとつけた名前をつけた。天皇というのは、実は道教の多少時代遅れになつた神だといふ説が、福永光司さんあたりによって出されましたが、そういう意識の産物としたら、天皇といふ名は面白い意識の産物だと思ふのです。

そうすると、中国的な律令国家を日本につくろうとしながら、しかも、对中国の意識が非常に強くて、同時にまだ大和朝廷のもとに属していない蝦夷を含めた統一国家をつくる理念として、日本という国号および天皇といふ名称が作られたのじゃないか。矢野先生のおっしゃる、一つの理念であつたといふのは、やはり考え方として正しいのじゃないかと思ひます。私もその理念でずっと日本国家はつくられて、それが完成したのは、おそらく明治国家じゃなからうかと考へております。

高 さつき日本という国名のお話を矢野先生からお伺いしましたけれども、実はこの間、私、これにつきまして調査をしまして、考えさせられたことがずいぶんあったのです。その中の一つは、中国の国名はどのようにできたかということからいろいろ考えさせられました。調査の結果としては、結局のところ、中国の昔の周の時代にすでに中国という名前ができたというふうに、文献ではなっているわけです。

実は、歴史を振り返ってみますと、その前の段階、種族、部族の段階では、いろいろの民族的な融合がありまして、黄河流域で中心的なところでは国家の、近代国家という概念でなくて古代国家という形ができたものですから、周の時代、西暦からいきますと紀元前の一五〇〇年の前後で中国という名前が文献の中に出てまいりました。

いまのお話、梅原猛先生のお話もそうなのですが、聖徳太子の時代、一応文献では日本という呼び方が出たというふうにおっしゃっているのですが、私もいろいろ勉強しまして、確かにそのへんから非常に顕著になってきたと考えますけれども、考えてみますと、いま矢野先生から、芸術的にできたというふうにおっしゃっております。芸術的という言葉はどういうふうに理解させていただいていいかわかりませんが、私はむしろ、一種の理念と概念という形でそれができたんじゃないかと思うのです。

つまり、その前には文化接触という運動がずんぶんあったわけですね。

その段階で東アジアという地域では文明がだんだん広がっていて、周辺の位置にある日本列島、そこにまたいろいろな技術なり、生活の営みなり、大陸からだんだん広がってきたという文化を摂取しまして、取り入れたわけですけども、その段階で、中国ではそういう形になっているものだから、一種の主体意識としてはそれに対抗する。これが一つ。

もう一つは、中国の文明に非常にあこがれていたものですから、それに習ってやるという考え方もあるのじゃないかと思うのですけれども、まったくの推測です。

結局のところ、私の言いたいことは、文化接触の中で、一種の期待があ

って、最初の段階では、たとえば三世紀、五世紀、古墳文化の時代、その後の時代ですが、ずっと習ったものですね。一種の慣性といえますか、情性といえますか、ずっと続いていまして、文明に對しまして非常に過大の期待をかけていたわけじゃないかと思えます。それでいまの日本という国名も出たのじゃないかと思えますけれども、その後からいろいろ充実をさせていって、だんだんできたわけですね。

つまり、いまの矢野先生のお話は、民族的な統合がまだできていなかった段階でそれが出たというふうには理解させていただいていいんじゃないかと思えます。まさにそのとおりだと思うのです。過大の期待とその後の充実、そのような解釈でいけるかなという感じがしております。

地域という問題につきまして、矢野先生のお話を伺いまして、地域という言葉は結局人工的な区画だとおっしゃっております。もしも、政治学の立場でみるということであれば確かに私は理解できると思えますし、またその一面もあるだろうと思えますけれども、もう一つは、たとえば文化人類学、あるいは古代文化という立場で考えてみますと、単なる人工的な面だけでは、完全に解釈できるかどうか、疑問に思うところがあります。簡単に言いますと、古代の文化としては、たとえば民族の移動だとかいうことがありまして、自然に広がっていった、人種だとか民族だとか、あるいは生活のスタイルだとかが同じようになっておりまして、一つの区域といえますか地域といえますか、それができたというふうには自然に見るわけですね。

私、ちょっとわかりませんので質問させていただいておりますが、人工的な面があるということは、近代のことですか、それとも全体のことですか。これが一つ。それから、人工的な面があるばかりではなくて、自然的にできた、そういう一面もあるのではないかという考え方なんですけれども。

芳賀 いま、高さんの質問の頭のところに出てきた芸術的ということと関係して、矢野さんは非常に明快な地域研究の諸概念の分析をなさった最後

に、三分間日本についてふれて、その中で、日本というのは七世紀にそういう概念ができて、その概念に沿って日本というものをつくりあげてきた芸術的なインテグレーションの過程、それが昭和十年代になって完成したのではないか。いわば日本というのは芸術的に完成された国であるというふうにとらえた。これがいまの国際化という世界の動きの中で問題になってきていて、これからむしろ、芸術的にかなり緻密にできあがった国を、隙間だらけのガタガタの国家にしていく必要がある。これが国際化というものであろう。非常にスマートに、矢野流に結論をつけた。

ここには、実は、非常に社会科学的に地域というものを厳密にとらえようとしている矢野さんのその衣の影に、日本はやっぱ芸術的に完成されたすばらしい国であるという一種の優越意識がひそんでいるのではないか。矢野さんはそうではないと言うかもしれないけれども、そう取られかねない。実際に、いま隙間だらけのガタガタの国家であって、何とか芸術的な統合になりたいとしている国々があるわけで、そこから見れば非常にうらやましい国であると、当然取られる。たとえばフィリピンですね。日本が国際化するというのはフィリピンのようになることなのか、そこはいろいろ問題があるのじゃないか。矢野さんがあいうふうな表現をした奥底にあるものは、何か日本のカルチャー・プロプリウムが、実は矢野さんの中にも動いているのではないかと思っただけです。

矢野さんは話の途中で、なぜ日本研究かという問題を出されて、そこにある絶対的、普遍的な価値を認めてはいけないのだと持っていたけれども、何かそこに、絶対的と言わなくても、ある普遍的価値があるからこそ日本研究が意味があり得るのではないかと、私も実は思う。むしろ露骨に日本は日本なりにかなり高い価値を持った国である。従って研究する値打ちがあるんだ。そういうふうに言ってもいいのではないか。

河合 大体こういうのは時間が迫ってきますと盛り上がるようになっておしまして、ここでやめるわけにいきませんので、せっかくのことです。吉田先生も一言言っていたきましようか。

吉田 地域研究という考え方は、いわば歴史的な一つの発想だろうと思います。私は、西のほうで言えばヘロドトスあたりがその最初であろうと考えますし、中国における史書の正史、史記以来のいろいろな分類法というのも、特に後のほうのいろいろな列伝のところ、これも一つのスタイルであつたろうと思う。ということは、地域研究というのは、もちろん矢野さんがずっと最初から言っておられるのですが、本来的に政治化されたものであつたとすれば、これの非政治化はたして可能なのか。それだけです。

矢野 まず、高先生から出ました問題で、地域というものは、政治では確かに人工的だけれども、文化的には現実には存在する、あるいは自然な地域というものはありはしないか。私もそうだと思います。ただし、えてしてそういう発想、つまり地域というものに樂天的に臨み得る地域の人もおれば、地域というものに対して非常に悲觀的に臨む地域の人もいます。ヨーロッパの人、アメリカの人、あるいは日本、あるいは日本の周辺の国々、たとえば韓国もそうだと思いますが、地域に対してはかなり樂天的に臨むキヤラクターを見せます。それに対して、東南アジアとかアフリカとか、そういう地域の国々の学者は非常に地域という概念に対して悲觀的というか、それを認めない方向で臨みがちだというコントラストがあるということだけ指摘させていただきたいと思います。

芳賀さんのコメントですが、ほんとにありがとうございます。人間というのは自分のことをよく知らないで、人から言われて、ああ、そうかなと思うところもありまして、私は、実は、やはりそうじゃないと言わざるを得ないのでですね。芳賀さんは、かなり挑戦的に私に直球のストレートを投げましたから、オープン戦のシーズンでもありますし、打ち返ないといけないのですが、私はなりわいが政治学でございまして、政治学者にとって統合というのを使うときはかなりアイロニカルに、深い思いをこめて使っているわけです。芸術的と言うときも、文章じゃなくて話言葉ですからカギカッコもチョンチョンもつけるわけにいかないので、誤解を招くのですけれども、私は、これはアイロニカルな概念として使っておるわけであ

りまして、日本という国は本当にご苦勞なことを嘗々千年以上もやってきた国だなど、牧歌的に私は語ったつもりでございます。

私は、日本がモデルになるかならないかと、いい国か悪い国かなんてことを言っているんじゃないかと、ほんとにたいへんなことをやってきたというところで言っているわけでございます。私はむしろフリーピンのほうが自然な国家かもしれないと思っておりますし、日本がむしろ、ナショナル・インテグレーションの面においては非常に特殊な背景を持っているということで、芳賀さんが、日本に普遍があるとかないとかいうことをおっしゃったけれども、私はそういうことはいささかも言っていないです。要するに、ナショナル・インテグレーションという難しいものをここまでやってのけた国というのはすごいなという慨嘆をこめて言ったわけです。

もう一つ、私がインプライしたことは、地域というものが成り立つためには、インテグレーションがうまくいかないといけないわけでありまして。インテグレーションと地域というのは、車の両輪みたいなものであります。その意味で、多くの地域が、私が地域性を持つてないということを言うコントラストとして日本をあげまして、こういう地域というのはあまりないんだぞということを言わんとしたわけであります。芳賀さんとは、機会を改めて、また議論したいと思います。

いま吉田先生が出されました、地域研究はそもそもポリテイサイズしたものであって、これを非政治化するすること自体難しいのではないかというご指摘は、私はそのとおりだと、個人的には思っております。ただし、にもかかわらず、そこが地域研究者のロマンでありまして、非政治化がでるのではないか、やるべきじゃないかという、ロマンティックな使命感を持ち続けているところに我々の商売の悲しいところがあるわけでございます。

河合 どうもありがとうございました。矢野先生、スタインホフ先生のお話に特に感じたのですが、方法的な、非常に本質的な問題についておられたのですが、矢野先生の政治力で最後の三分間にまかれた種にみんな飛

びついて、ちょっと方法的なほうの議論が出なかったのは残念な気がしましたけれども、討論それ自体は非常に意味があったと思います。